

Emergency

Watch No.49 Jan. 2015



神戸こども初期急病センター

2014年12月受診者数：4554人

【訴え】

1. 発熱 : 3446人 (3042人)
2. 咳嗽 : 2357人 (276人)
3. 鼻汁 : 1761人 (18人)
4. 頭痛 : 672人 (25人)
5. 嘔吐 : 844人 (431人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

【疾患頻度】

1. インフルエンザ : 1715人
2. 急性上気道炎・咽頭炎 : 1185人
3. 感染性胃腸炎 : 555人
4. 気管支炎 : 123人
5. クループ性気管支炎 : 95人

2015年になりました。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

テレビや新聞報道でご存知のように、兵庫県もインフルエンザ流行警報が出ています。12月は、特に年末にインフルエンザの流行があり、神戸こども初期急病センターを受診した患者さんが増え、開設以来最高の受診者数で、4554人でした。インフルエンザと確定される人が1715人も受診されました。今年の流行株は、A香港型です。いつにもまして、感染予防につとめることをお願いします。

さて、インフルエンザと診断されますと、体内でインフルエンザの増殖を抑える抗インフルエンザ薬（タミフル、リレンザ、イナビル、ラピアクタ）の処方を受ける人が多いと思います。最近、基礎疾患のない健康な大人や子供への抗インフルエンザ薬の使用に関して、興味深い議論がありましたので、お知らせします。

2014年4月に、抗インフルエンザ薬の治療効果に関するまとめが報告されました（Cochrane Database of Systematic Reviews*、2014）。この報告は健康な成人および小児におけるインフルエンザ軽症例に対する抗インフルエンザ薬の効果を検証したものです。結果は、抗インフルエンザ薬の効果は有熱期間の短縮のみであり、肺炎などの合併症予防効果や入院予防効果は明らかにされませんでした。逆に、嘔吐などの副作用が増加することも示されました。この結果を受けて、健康な成人および小児には、有熱期間の短縮以外、抗インフルエンザ薬の効果はないと考えられ、抗インフルエンザ薬は不要ではないかという意見が出されました。その一方で、インフルエンザによる入院例を対象とした研究の多くで重症化予防効果が示されています。その報告の1つ（Lancet Respir Med*、2014）では、健康成人で抗インフルエンザ薬治療により致命率の低下が認められ、重症化予防効果があるとされています。このように、インフルエンザは自然軽快する疾患でもあるため、諸外国では健康な人への抗インフルエンザ薬の使用に関しては様々な意見があります。

健康人への抗インフルエンザ薬の早期使用は、有熱期間を短縮できることは間違いありませんので（Clin Infect Dis*、2010）、「基礎疾患を有さない健康な人であっても、症状出現から48時間以内にインフルエンザと診断された場合は使用する意味がある」、その一方で、「自然軽快する疾患でもあり、抗インフルエンザ薬の使用は絶対に必要なものでもない」、一見矛盾しているようにも見えますが、これが、現在の結論というところでしょうか。

* その内容が載っている医学雑誌名です。

